

医師の感情

「平静の心」がゆれるとき

Danielle Ofri【原著】

堀内 志奈【訳】

評者

平島 修

徳洲会奄美ブロック総合診療研修センター長

「医療現場をこれほどまでに赤裸々に、リアルに書いていいものだろうか」という驚きがこの本を読んで生じた感情だった。いてもたってもいられず、本書の書評を書かせてほしいと出版担当者をお願いしてしまった。「医師はいかなる時も平静の心を持って患者と向き合うべきである」と説いた臨床医学の基礎を作ったウィリアム・オスラー先生の「平静の心」を揺るがす内容なのである。

「医師は患者に必要な以上に感情移入してはいけない」

医師なら一度は耳にした言葉であると思うが、医師は感情を意識的に心に押し込んでおくことが本当に正しいのだろうか。本書はこのタブーとさえされてきたような感情の問題を、医師にはどのような感情が生まれ、どのように反応してしまうのかを、掘り下げてゆく。命を扱う医師という職業は他の職業と違い、さまざまな感情の波が患者本人や家族だけでなく押し寄せる職業である。医療の主役は患者であり、疾患を患った患者

がいかなる感情を抱くかに関してこれまで何度も議論されてきたが、医師が受ける感情に関する議論はほとんどされてこなかった。

「不安・恐怖・悲しみ・恥・怒り・困惑・幻滅」といった感情は、医師が臨床現場で日常的に感じる感情である。このような感情についてエピソードを交えて述べられているが、筆者の壮絶な経験と心の中で揺れ動く葛藤は、臨床医なら身近に感じられる内容で描かれており、どんどん引き込まれてゆく。医師がアルコール依存症患者や肥満患者に軽蔑の念を抱くことや、寝たきり患者が発熱を主訴に救急外来に運ばれると“gomer”（go out of my ER）と差別的な用語で呼ばれる現状をありのままに指摘し、医学生が持つ純粋な気持ちがどのようになくなっていくのかについても冷静に分析している。また本書は医療ミスの原因となる感情も指摘している。医師の不安や恐れといった感情はあたかもひた隠しにされ、ミスのない完璧な医術を要求される。しかしミスが大きか

れ、小さかれ、なくなることはない。医療機器は発展してもそれを扱う医師が血の通う人間であるならば、システムだけを指摘するのではなく、背景となった感情にまで言及しなければ医療ミスを明らかにすることすらできない。本書で書かれているエピソードは、筆者が訴える「平静な心」ではいられないという言葉に非常に納得させられる内容である。

「医師の感情」はこれまであまり認識されてこなかった内容であるが、医師―患者関係を良好にする意味で非常に重要な基盤となる。これから医療現場に臨む医学生から指導医まで、共通した認識を持つためにもぜひ読んでいただきたい一冊である。

四六判・頁 384

2016 年 6 月

定価：本体 3,200 円＋税

[ISBN978-4-260-02503-4]

医学書院刊

